

|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | Contextual Sensitivityを「見える化」する適正テスト : ロシア語版試験問題の作成を踏まえて                    |
| Author(s)    | 三好, マリア                                                                     |
| Citation     | ISOコミュニティ 通訳認証実績報告書. 2022, p. 21-31                                         |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/87471">https://doi.org/10.18910/87471</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## II. 認証を支える「適正テスト」: 極めるアナリストたち



# Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テスト

## ーロシア語版試験問題の作成を踏まえてー

京都外国語大学外国語学部ロシア語学科 専任講師

三好マリア

### 1. はじめに

2021年夏季に、ISO コミュニティ通訳認証言語能力審査官の林田雅至先生から、京都外国語大学外国語学部ロシア語学科学科長の林田理恵先生を介して、Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テストのロシア語版を作成しないかという依頼が著者のところに来た。当時、日本で受験可能な日ロ通訳試験といえば、日本政府観光局（JNTO）が主催となって実施しているロシア語通訳案内士試験のみであったが、あくまでも観光業で活躍できるガイド養成を行うことに重きを置いているものである。一方、Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テストは、主に防災、環境問題、保健衛生など、観光案内よりはコミュニティ通訳に必要な分野を扱うという点で、ロシア語通訳案内士試験とは意図が大きく異なると言える。

著者は上記の依頼を引き受け、当学科の林田理恵学科長、アンナ・バリノワ准教授、石田麻希子事務助手に多大の御協力を仰ぎ、そのおかげで、音源を含めた Power Point の問題用紙ならびに Google Forms の回答用紙を仕上げることができた。そして、パイロット版の日ロ試験を2021年12月3日に、同学科・グレゴリー・ミソチコ准教授を対象に実施した<sup>1</sup>。

本稿では、Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テストのロシア語版作成者側として、その作成過程の主な特徴について報告を兼ねて述べることとする。

### 2. 本テストに出現する設問のタイプについて

著者は、Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テストのロシア語版を作成することとなった折に、参考資料として現行の日英試験の問題用紙を受け取った。しかし、現実問題として、ロシア語版を英語版に完全に合致させることが極めて困難であったため、著者な

りに工夫をし、試行錯誤を繰り返さなければならなかった。そこで、受け取った資料を分析した結果、《選択肢》を次の三つのタイプに分類し、作成に取り掛かることとした。各問における受験者の情報処理過程については、林田他（2021）で詳しく述べられているが、著者による分類や各タイプの解釈はあくまでも著者独自の解釈であり、問題作成上、便宜を図ったものであることを言っておきたい。

タイプ①は、語彙論の用語でいう統合関係（syntagmatic relations<sup>2</sup>）に関わる《選択肢》である。そのうち、語と語の間の統合関係のみならず、同一語内における文字と文字との間の統合関係、いわゆる正書法（orthography）に関わる《選択肢》も区別できる。タイプ②は、同じく語彙論の用語でいう系列関係（paradigmatic relations<sup>3</sup>、主に類義語関連）に関わる《選択肢》である。そして、タイプ③は、①と②を合体したものであり、統合関係にも系列関係にも同時に関わる《選択肢》である。

Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テストのロシア語版を作らる必要性があったのは、全試験のうち、問題 1・3 のセクション I、および、問題 2・4 のセクション II のみである。本稿では、これらのセクションに出現する《選択肢》を上記のタイプごとに取り上げ、各タイプの《選択肢》を考えるにあたり、著者が特に工夫した点を主として述べることにする。

### 3. 問題 1・3 のセクション I における選択肢の特性について

前述のように、著者は、Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テストのロシア語版の作成に取り掛かる前に、見本としてその英語版を丹念にチェックしたが、言うまでもなく、ロシア語はその構造において英語と似ているところがあれば、異なる点も数多くある。そのため、いくら英語を参照してロシア語版問題の作成にチャレンジしようと思っても、単純な翻訳作業ではうまく行かず、日ロ両言語を高度に運用できる受験者にも選択を考えさせるような《選択肢》とするためには、ロシア語固有の特性を活かしながら、相当の工夫をすることになった。本節では、まず、問題 1・3 のセクション I の問題作成の特徴や、著者が主として工夫した点について言及する。

問題 1・3 のセクション I は、ロシア語テキストの音声を 3 回聞いた後に、自分の書き取り（ノートテイキング）に基づいて文章中に用いられた単語や語句と一致する正しいものを《選択肢》の中から選ぶという内容のセクションである。四選択形式であり、1・3 の各問題は 10 問の設問から構成されている。なお、本稿では、便宜上、原則として 4 選択のう

ち最も代表的と思われる《選択肢》のみを取り上げ、そうでないものは「…」で示し、省略することとする。また、格変化の形にこそ焦点が置かれている場合を除き、実際の形にかかわらず、全ての《選択肢》を主格で挙げることにする。

さて、英語版の問題1・3のセクションIに出現する《選択肢》は、主にタイプ①のものであり、中でも単純な正書法の知識を問う設問が大部分を占める。その一例として、例えば次の(1)(2)のようなものが挙げられる。<sup>4</sup>

(1) carbon dioxide / \*carban dyeoxide / \*carbon dioxide / \*carbon dioxide

(2) atmosphere / \*atmosphre / \*atmosfire / \*atmosphair

[問題1 セクションI より]

著者は、上記を参考に、次の(3)(4)のようなロシア語問題を作った。

(3) {ископаемого / \*изкопаемого / \*из копаемого / \*искупаемого} топлива<sup>5</sup>

=化石燃料

(4) {двуокись / \*двухокись} углерода / \*{двуокись / двухокись} углевода

=二酸化炭素

[問題1 セクションI より]

(3)では、ископаемогоが正解となるが、それと発音が非常によく似ているものを不正解の《選択肢》としている。具体的に、次の(3')に示した通りである。

(3') ископаемого 「掘り出される、採掘される」を意味し、正解にあたる。文字通り[is]と発音され、語根が無声子音の[k]で始まるため正書法に従って ис-と綴られる接頭辞が用いられている。

изкопаемого 正書法上間違っただけにはなっているが、接頭辞のところを仮に из-と綴った場合でも、[z]が無声化して正解と同じく[is]と発音される。また、из-という接頭辞は実際に存在するため、なおさら引っ掛かりやすい選択肢であると言える。

изкопаемого 一語ではなく、前置詞+名詞の語句として綴られた選択肢である。この場合、из前置詞が無声子音の[k]で始まる名詞に先行する場合、綴りに拘らず無声化して、正解と同じく[is]と発音されるため、引っ掛かりやすい選択肢である<sup>6</sup>。

искупаемого 中の-к у-音節は、無力点音節であるため/ku/と発音され、正解と非常に類似したように発音される<sup>7</sup>。

また、(4)も、*двуокись* と *двухокись*、また、*углерод* と *углевод* という選択肢が一文字のみ異なるという誤綴り字の一例である。しかし、実際には、ロシア語版の(3)(4)は、英語版の(1)(2)よりもやや難易度が高い設問である。なぜなら、純粋なタイプ①ではなく、タイプ②の要素も含まれているためである。具体的に、(3)では、前置詞の *из* も形動詞の *копаемое* も実際に存在する単語であり、それぞれ「～の中から」「掘られている」を意味する。また、(4)においても、*углевода* という単語は実際に存在し、「炭水化物」を意味する。このように、*ископаемого* と *искупаемого*、また、*углерода* と *углевода* は、正確に言うとは単なる誤綴り字ではなく、いわゆる類音語 (allophones)<sup>8</sup> である。類音関係は言語学上系列関係にあたるため、(3)(4)ともに、タイプ①ではなくタイプ③に分類したほうが適切である。

タイプ①の選択肢には、上述したような誤綴り字の選択肢以外にも、文法に関わる選択肢も見られた。英語版の場合、その一例として例えば次の(5)(6)が挙げられる。(5)は単数・複数の使い分け、(6)はそれに加えて冠詞の用法に関わる選択肢である。

(5) *hundreds of thousands* / \**hundred of thousand of years* / … / …

(6) *vegetation and the oceans* / \**vegetation and oceans* / \**vegetation and the ocean* / …

[問題 1 セクション I より]

(5)の単数・複数の区別については、ロシア語でもある程度疑似化できる<sup>9</sup>のに対し、(6)の冠詞はロシア語には存在しないため、これと似たような選択肢は作り難い。そこで、著者は、ロシア語の特性を活かして、次の(7)のような数詞と名詞の格変化を問う選択肢を考えた。

(7) {*несколько сотен* / \**несколько сотней* / \**несколько сотен* / \**несколько сотней*} *тысяч лет*  
= 数十万年

[問題 1 セクション I より]

(7)は、文法知識だけで解ける、それほど難易度が高くない設問であると言える。(7)における数詞の *несколько* は主格形、*несколько* は生格形、また、名詞の *сотен* は複数生格形、*сотней* は単数与格形<sup>10</sup>であり、いずれも存在する形である。(7)はそれらの正しい組み合わせが問われるが、それを判断するには、*несколько* にかかる名詞が何格に当たるのか、また、*несколько* の前に何が来てそれが何格を要求するのか、つまり前後の統合関係に鑑みる必要性があり、(7)のような設問もタイプ①に当てはまると言える。

また、英語版の(5)を模範とし、次の(8)にあるような単数・複数の使い分けを問う選択肢も考えたが、実際にはタイプ①よりはタイプ③に近い性質の選択肢となったと言える。

(8) *результаты исследования* / \**результаты исследований* / \**результат исследования* /

\*результат исследований

= 調査結果

[問題 1 セクション I より]

(8)は、一見、英語版《選択肢》(5)と似たような設問に見えるが、英語と違い、文脈をみてもいずれの選択肢も正解として考えられる。この場合、受検者は何を頼りとすれば良いかと言うと、自分のヒアリングやノート・テイキングのスキルである。さらに、両言語における複数形の発音上の大きな違いは、英語の場合、子音の[s]あるいは[z]がつくおかげで、聴力で明確に単数・複数の区別がつくのに対し、ロシア語の場合には子音ではなく母音がつき、さらに、それが無力点音節<sup>11</sup>を成し無声化することが多いため、余程集中して聞き取らなければ、聴力で区別し難い場合が多い。複数と単数とで、どれほど発音が酷似しているか、下記(8')に示す通りである。

- (8') результат /r'izul'tát/ — результаты /r'izul'tát̚i/  
= 結果 (単数形) = 諸結果 (複数形)  
исследования /issl'édəvən'ijə/ — исследований /issl'édəvən'ij/  
= 調査 (単数形) = 諸調査 (複数形)

著者がロシア語版試験に(8)のような《選択肢》を盛り込んだことには、次の理由がある。ロシア語の発話において人や物について、それが具体的に何人(何個)なのかではなく、一人(一個)または数人(数個)であるということを表現したいとき、形容詞句「何人かの」あるいは「いくつかの」を付けずに、単に単数形または複数形で発話することが多い。しかし、著者自身が有するロシア語を教える経験に照らせば、ロシア語非母語話者の耳には、(8)で示したような単数・複数の微妙な違いが聞き取りにくいのは事実である。基本的に単数・複数の区別をほとんどしないとされる日本語を母語とする学習者の場合には、なおさらのことである。そのため、本テストの受検者(通訳者)に求められる集中力や聴力による聞き分け能力の格好の試金石として、(8)のような《選択肢》も取り入れることとした。次に、同じく問題 1 及び問題 3 それぞれのセクション I に出現するタイプ②に属する、系列関係を問う《選択肢》について触れてみる。英語版で言うと、次の(9)がそれに当たる。

(9) global warming / \*global heating / … / …

(10) {reduce / \*reduct<sup>12</sup> / … / …} the risk

[問題 1 及び問題 3 セクション I より]

(9)における warming と heating は、それぞれ「あたためる」を意味する動詞<sup>13</sup>から来て



いる。また、(10)では、reduce も reduct も「低減させる」という意味を持つ動詞であるが、reduce のほうは現代英語において一般的に使われているのに対し、reduct は動詞の形では用いられなくなっている<sup>14</sup>という点で使い分けられている。これも、選択的系列関係にあると言える。

さて、著者がそれを踏襲して作成したロシア語版の《選択肢》として、次の(11)(12)が挙げられる。

(11) индивидуальные средства {профилактики / \*защиты / \*охраны / \*дезинфекции}

= 個人用 {予防／保護／保守／消毒<sup>15</sup>} 具

(12) {важным / \*важнейшим} элементом / {\*важным / \*важнейшим} компонентом

= {重要な／最重要な} 要素／ {重要な／最重要な} 成分

[問題 3 セクション I より]

(11)では、それぞれ「予防」「保護」「保守」と類似した内容を意味する名詞が列挙されており、系列関係を成している。また、(12)においても、「要素」及び「成分」、さらに「重要な」及び「最重要な」という、似通った意味を持つ、同じく系列関係にある単語が四通りの組み合わせを構成し《選択肢》に挙がっている。このタイプ③に当たる設問と、上で見てきたタイプ①の設問との大きな相違点は、後者の場合受検者は自分の何らかの知識（正書法や文法等の知識）をうまく動員さえすれば、ある程度解けるのに対し、前者では知識よりは自分のメモに頼らなければいけない点にある。

ここで、著者が上記の(11)(12)の設問をその趣旨に鑑みて、さらに推敲させてみたものが、次の(13)(14)である。

(13) {невидимый исторический / \*невиданный историчный / … / …} максимум

= 歴史上見られなかったレベル

(14) {выделяемый / \*выделенный / \*выделяющийся / \*выделившийся} при сжигании

= 燃焼により放出される

[問題 1 セクション I より]

(13)(14)ともに、接尾辞による意味の使い分けを問う設問であり、受検者による書き取りのスキルのみならず、加えて一層の知識を要求する点で、上記の(11)(12)と大きく違うと言える。なお、詳しくは後述することとする。(13)における невидимый と невиданный、さらに、исторический と историчный は、それぞれ не видеть (=見えない) と история (=歴史) から派生した形動詞と形容詞である。この場合、その派生接尾辞が、-им-なのか-анн-なの

か、また-ическ-なのか-ичн-なのかによって、意味が異なってくる。そのうち、исторический と историчный よりは невидимый と невиданный のほうが意味の違いが際立っている。具体的には、下記(13')にある通りである。

|                 |   |            |
|-----------------|---|------------|
| (13') невидимый | — | невиданный |
| =目に見えない         |   | =以前見たことのない |
| исторический    | — | историчный |
| =歴史上の           |   | =歴史的に正確な   |

(14)における выделяемый, выделенный, выделяющийся, выделившийся は、「放出する」を意味する不完了体の выделять と完了体の выделить という動詞のいずれかから派生した形動詞の一例である。なお、それらが完了体動詞から派生したのか不完了体動詞から派生したのか、また派生に用いられた接尾辞によって多少意味が異なってくる。(14)は、(13)と違い、意味の違いよりは、ニュアンスの違いを生ぜしめるため、(13)より解きにくい設問であると言える。具体的なニュアンスの違いは、下記(14')に示した通りである。

|                  |                                       |
|------------------|---------------------------------------|
| (14') выделяемый | 受動的に（何かによって）繰り返し排出される。または、現在排出されつつある。 |
| выделенный       | 受動的に（何かによって）一回のみ排出された。                |
| выделяющийся     | 能動的に（勝手に）繰り返し放出される。または、現在放出されつつある。    |
| выделившийся     | 能動的に（勝手に）一回のみ放出された。                   |

このように、同じタイプ②の中にも、性質の異なる設問が差別化できる。一つ目は、(11)(12)のような単純な書き取りのスキルで解ける設問と、(13)(14)のような、上記に加えて語彙の知識や短期記憶力なども必要となってくる設問である。

また、タイプ①の設問でも、書き取りのスキルはそれほど重要ではないと言える。それはなぜか、次に詳述する。著者は、2019年に大阪大学大学院にて「高度副プログラム」の枠組みで開講された医療通訳養成コース及び司法通訳養成コースを受講し、また、実際の通訳現場においても数年にわたる経験を積んできている。その経験に鑑みて、通訳者が実際にメモを取る場合、それを極めて限定的な時間内に行わなければならない頻繁に特殊記号を用いたり、各単語の途中までしか書き留めなかったりすることがほとんどである。具体的に、例えば、タイプ②の(11)に出て来る「индивидуальные средства профилактики」というところを、「инд. ср-ва проф.」などのように書き留める。そのように書き留めておけば、正解の

профилактики を、不正解の защиты, охраны 及び дезинфекции と正確に区別(差別化)できる。これは、タイプ②の中でも比較的解きやすい設問の一例である。しかし、例えば、同じくタイプ②の(13)にあった「невиданный исторический」を書き留める場合には、おそらく「невид. истор.」のような書き留め方をすることになる。しかし、この場合、上述の(7)と違い、невидимый なのか невиданный なのか、また、историчный なのか исторический なのか、このメモだけでは判別できないため、受検者(通訳者)の語彙の知識や短期記憶力が必要となってくる。つまり、同じタイプ②でも、やや難易度が上がる設問となる。また、タイプ①にあった(7)のような設問も同様に、受検者(通訳者)が「несколько сотен」を「неск. сот.」あるいは「неск. 100」と書き留めたとすれば、その正しい綴りはやはり自分の正書法の知識に基づいて判断しなければならない。そういう点では、タイプ①の設問は、(13)(14)にあったようなタイプ②の設問とよく似ていると言える。

#### 4. 問題 2・4 のセクション II における《選択肢》の特性について

次に、問題 2・4 のセクション II について見ていく。問題 2・4 のセクション II は、各問題のセクション I で音読された日本語発話の露訳文が提示され、所々空白になっている。セクション I で書き取った日本語のメモに基づき、翻訳文の空白内に入る適切なものを《選択肢》の中から選ぶ方式の 4 選択肢から構成され、問題 2 には 28 問、問題 4 には 36 問の設問から成り立っている。

問題 2・4 は、問題 1・3 と違い、翻訳のスキルを問うセクションであるため、系列関係に関わる、つまりタイプ②の設問が主である。英語版でいうと、次の(13)(14)がそれに当たる。

(13) directions / \*restrictions / \*rules / \*manuals

(14) work / \*do / \*made / \*help

[問題 2 セクション II より]

このうち、(14)は、特定の文脈において初めて他の語と系列関係を成す語 (help) が含まれている点では、上述の(11)と似ている設問であると言える。

また、稀に、系列関係も統合関係も同時に問う、つまりタイプ①とタイプ②を合わせた設問もある。例えば、次の(15)がそれに当たると言える。

(15) including / \*included {smth} / \*excluding / \*excluded

[問題 4 セクション II より]

(15)では、「～を含めて」の英訳を当てなければならないが、まず、系列関係にある exclude と include の中から選択する。その後、それが-ed 形なのか-ing 形なのかを判断するが、これは統合関係であるため、前後の文脈を汲み取る必要がある。

上記の設問をロシア語版に反映させた実例は、次の(16), (17), (18)である。

(16) роста / \*подъёма / \*падения / \*сокращения {туристов}

= (観光客数の) 増加 / \*繁栄 / \*下落 / \*縮小

(17) {ситуация} улучшилась / \*изменилась / \*прояснилась / \*сменилась

= (状況が) 改善した / \*変更した / \*はっきりした / \*交代する

(18) посещающих / \*приезжающих / \*переехавших / \*иммигрировавших {Японию}

= (日本) を訪問する / \*に到着する / \*に引っ越す / \*に移住する

[問題 4 セクション II より]

(16)は、観光客数が増えたのか減ったのかという状況を把握し、消去法により残した二つの選択肢の中から自分の書き取りに基づいて解答を選べばよい。この三つの中で最も解きやすい設問である。(17)では、изменилась と сменилась という非常に類似した意味の二語が用いられており、発音もよく似ているため、「状況が変わった」という文脈が把握できただけでは足りず、前者は単独でも使えるのに対して、後者は必ず「何に代わったか、何と交代したか」という項が要求される、という文法知識が必要となってくる。(18)でも、いずれも似たような意味の《選択肢》となっているが、系列関係のみならず、後続の Японию との統合関係もみて判断しなければならない<sup>16</sup>。

このように、問題 2・4 のセクション II では、文法的知識よりも語彙的知識が必須となってくるが、その理由は受検者の通訳・翻訳スキルに主な焦点が置かれているためと言える。

## 5. おわりに

本稿では、Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テストのロシア語版を作成するにあたり、著者が試験問題を三つのタイプに分類し、その分類に従い、ロシア語の設問を考えたプロセスの特徴について報告した。本テストのロシア語版の作成プロセスは、単純な翻訳作業にはならず、ロシア語を高度に運用できるロシア語非母語話者、また、日本語を高度に運用できる日本語非母語話者の立場を見据えて、受検者に選択を迷わせるような工夫が必要であった。その工夫には、ロシア語の特性をどう生かせるかという点について、著者は

大いに考え抜いたのである。結果として、特色あるロシア語版試験に仕上げることができたが、英語版よりやや難易度が高いテストになったと今、振り返る。具体的に、問題1・3のセクションIについては、書き取りメモをいちいち参照しなくても、受検者は習得(獲得)している正書法等の知識のみで、ある程度解けるというタイプ①の設問よりも、語彙や文法の知識も同時に必要となってくるタイプ③の設問が分量的に圧倒的に多くなった。その主な理由として、次の二つの点が挙げられる。

一つ目は、試験で取り扱われるテキストの内容からすれば、日露両言語においても相当の運用能力を持つ受検者を対象としたもののように思えたため、設問も難しく考え過ぎた嫌いはある。二つ目の理由は、系統の異なる両言語のそれぞれの特徴ゆえに、ロシア語版を英語版に完全に合致させることは極めて難かしく、調整作業が困難を極めた。しかし、その調整作業に必要な情報として、誤綴り字の問題が何問、類義語の問題が何問かと設定するといった、試験全体における各問の割合に関する明確な情報が、受け取った資料の中には記載されていなかった。そのため、《選択肢》の内容に偏りが生ぜざるを得なかった。今後、上記の反省点を踏まえ、各問の割合を設定した上でロシア語版のさらなる改善に尽力したいと思う。

#### 参考資料：

Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テスト (2021) 英語版. 大阪観光大学

田中春美 (1988) : 『現代言語学辞典』 成美堂.

林田雅至, 小森三恵, 佐藤晶子 (2021) 「高等教育機関による『ISO13611:2014 通訳—コミュニティ通訳のためのガイドライン』認証授与と言語運用能力に関する適正テスト実施について」. 日本通訳翻訳学会 (2021.9.5 発表).

(投稿日：2022年2月9日)

(受理日：2022年2月16日)

---

<sup>1</sup> 受検者のミソチコ准教授はロシア語母語話者でありながら、優れた日本語能力を有し、通訳経験も豊富であるため、パイロット版の受検者として最適人材であると判断された。

<sup>2</sup> 現代言語学辞典 (1988) では、syntagmatic relations は「二つ (以上) の要素が連結的または並列的に置かれて、より大きな単位 (unit) を作る関係」と定義されている。

<sup>3</sup> 現代言語学辞典 (1988) では、paradigmatic relations は「二つ (以上) の要素が分立的 (either-or) ある

---

いは排他的・選択的であること」と定義されている。

- <sup>4</sup> 本稿における例文の番号は問題用紙の原文とは必ずしも一致しない。また、星印は不正解、イコール記号は和訳、下線部は特に注目したい箇所、イタリック体は後で詳しく言及する箇所をそれぞれ指す。
- <sup>5</sup> 生格の形。
- <sup>6</sup> さらに言えば、文法上でも、もともと из 前置詞がそれに後続する品詞に生格を要求し、実際の選択肢である「из копаемого」においても копаемое 形動詞が生格の形 (копаемого) をとっているため、なおさら引掛かりやすくなっていると言える。しかし、この場合、そもそも前置詞が必要かどうかを決めるには、やはり全体の文脈との統語関係をみないといけないため、タイプ①の選択肢であると言える。
- <sup>7</sup> 正解の ископаемого における -ко-音節も無力点音節であり、/kə/と発音される。
- <sup>8</sup> 聞こえはよく似るが、意味が違うという語のこと。
- <sup>9</sup> 英語に倣って実際に作成した設問として次の(8)がある。
- <sup>10</sup> 単数主格形は *сотня*。
- <sup>11</sup> アクセントのかかっていない音節のこと。
- <sup>12</sup> このうち、reduct については、現代英語では、名詞の形 (reduction) ではよく用いられているが、動詞の形ではあまり用いられていないが、その知識もやはり語彙論の知識に当たる。
- <sup>13</sup> warm と heat。
- <sup>14</sup> 名詞の形 (reduction) ではよく用いられている。
- <sup>15</sup> 「消毒」は単独で見ると他の選択肢と系列関係をなしているとはいえないが、設問の文脈においてのみ類義語として扱える。
- <sup>16</sup> Японию (にほんを) が対格になっており前置詞を伴わないため、選択肢の中で唯一対格と共起し前置詞を要しない посещающих (訪問する) を選ぶ。他は、同じ対格と共起するが、必ず、方向を表す в (～へ) という前置詞を要求する。